

## なかまで作った「たまごの家ハッピーかるた」

－作って遊んで見えてきたこと－

世田谷区介護予防・日常生活支援総合事業  
住民主体型地域デイサービス「たまごの家」

坂本 たか子、石川 道子、中村 美雪、加藤 美枝

(地域デイサービス 世代間交流 コミュニケーション)

### 1. 背景と目的

住民主体型地域デイサービスの一環として2016年に立ち上げられた「たまごの家」は、‘老いも若きも笑顔で交流’の場づくりを目指している。「たまごの家」の‘たまご’は、「他人の孫も、自分の孫も、地域の孫」を意図している。

構成は利用者・ボランティア・スタッフとなっているが、その垣根は低く、時に利用者、時にスタッフ、時にボランティアと役割をゆるやかに移動して、その日の集会を盛り上げている。その日参加している人のもてる技と知恵を出し合っていると互いに思い

がけない気づきがあり、その発見を楽しんでいる。参加者（利用者・スタッフ・ボランティア）の年齢は3歳から94歳に及んでいる。幼児が参加する時は、母と子であったり、祖母と孫、近所の他孫も一緒に。片や、高齢者はほとんど自力で来所するが、仲間の姿が見えないと互いに気づかいの声を掛け合っている。

毎土曜日、参加者全員が語らう中から集めてきた言葉を活動に生かしたいという想いから、開設4周年の節目となる2020年に向けて「たまごの家ハッピーかるた」計画を立ち上げた。参加者に加えて外部の協力者を巻き込んで「たまごの家」の「かるた」を手作りして遊ぶことが、私たちの願いにつながる活動になることを期待した。



「たまごの家」の願い

### 2. 実践内容

「かるた」作りは言葉の収集から始めた。最初は既存のかるたことばに影響されていたが、次第に、活動時や、折々の生活の中で感じている言葉などが拾い集められ文字札となった。絵札は、それらの言葉から描き上げられたが、絵が先行して、時間も場所も問わない自由な発想で描かれた原画も届けられた。それに言葉を付けるということで「50音の音一つに札が一つ」にこだわらない手順が自然とできあがった。手作り「かるた」に関わった人たちは幼児、小学生、大学の実習生、参加者の知人、高齢者にまで広がる。約1年余をかけて80組のかるた札が作成された。

「かるた」の遊び方は、コロナ禍の中でどう工夫するか話し合いながら試行した。昨年の暮れ、第1回のかるた会はテーブルに絵札を広げ、読み手によって文字札が読み上げられ、絵札探しを競った。コロナウイルス感染拡大による「たまごの家」活動休止（2020.2～2020.7）を経て、3密を避けるための遊び方を試行しながら9月に第2回、10月には第3回を開催した。



「かるた」作例

### 3. 「かるた」を作って遊んで見えてきたこと

作り手が遊び手となる「かるた」遊びは、その思い出が深く、読み手も取り手もその言葉に聞き入り、手に取った絵に見入っていると、自然に語りが始まり、次々と感想・思い出が披露される場となった。まさにコミュニケーションのツールになっている。

遊びの回を重ねても同じことの繰り返しとはならない。3密を避ける工夫にもアイデアが参加者から気軽にだされ、時間をおかず試される光景が広がる。

### 4. 「かるた」作りと遊びを広げる

「たまごの家」に関わる人を出来るだけたくさん巻き込むことを目論んで始めたこの「かるた」作りの活動は、外部の人との出会いを深め、「かるた」を作ることで、遊ぶことを同時に経験する中で自分の語りも隣りの人の語りも幅広く交換された。

「たまごの家かるた」は作成途中である。この「かるた」を手にした人たちの自由な発想で、完成させることを楽しみ、かつ、遊び方が創案されることを広げていきたい。



加藤美枝・中村美雪



石川道子・坂本たか子

oo

<助言者コメント>

長谷川 幹 (三軒茶屋内科リハビリテーションクリニック院長)

.....

最初、「たまご」は「卵」と思っていたのですが、「他孫」とわかり地域を見据えていて命名が素敵と思いました。それにしても、参加者が3歳から94歳までとなかなかできないことで日頃の活動の成果と考えられます。

かるた作りは、1年もかけさまざまな人が加わってできたので、「思い出が強く・・感想・思い出が披露される場となった」と、既成のカルタでは出てこない創作による好影響と思います。

子どもから高齢者まで一緒に活動することを実現し、さらにカルタを創作し、遊び方をこれから創案していくとのこと、まさしく地域包括ケアのありようの模範になるでしょう。他の地域へ広がることが楽しみです。